

「合目的性」

karinomaki

何々でなく、何々もまた

英語で、not only but alsoという言葉があります。「何々だけでなく、何々もまた」という意味ですが、この言葉と、「合目的性」という言葉を比較してみましょう。

「合目的性」とは、カントの判断力批判において、さかんに出てくる言葉なのですが、これを私なりに、暮らしの中から考えてみます。

どうしても、許せないことについて

例えば、人に理不尽に傷つけられたとしましょう。あなたは、必死で、理屈を考えて納得しようとするのですが、だめである・・・そんなときに、この、「not only but also」と、「合目的性」がやくにたちます。ここで、「合目的性」のわかりやすい解釈を書いておきましょう。これは、「理にかなった」という意味です。カントは、もっと深く、この言葉を追及していますが、ここでは簡単に考えて下さい。どうして、「何々だけでなく、何々もまた」と、「理にかなった」がやくにたつのか。それは、あなたのどうにもならない傷をいやすためです。

傷を癒すためにあなたは何をしますか？周りに「あの人はひどいひどい」と言い続けることですか。もっと簡単な解決方法が、この二つの言葉なのです。

円

円という言葉は、「縁」に似ています。これも哲学用語ですが、これは、not only but alsoと、合目的性（理にかなった）をつなげます。

もし、あなたがめっちゃくちゃにふみにじられて、それが、全く「理にかなわない」傷であるとき、この円は力を発揮します。因果律という言葉があります。これも、カントが純粋理性批判で問題にしている言葉なのですが、因果律は、「因果応報」を作ります。具体的には、「物事には全て理由がある」という意味なのですが、ここでは、因果応報の「円」と考えて下さい。

理不尽な傷こそ、神様が最も黙ってられない罪なので、必ず相手はずっと苦しい人生を送ることになるのです。いや、そうではなく、空っぽの人生と言っていいでしょうか。

つまり、あなたの傷の分以上に、相手は空虚な心になっていくのです。

それはつまり、あなたの傷が深ければ深いほど、相手の心を吸い込むのです。

円の形を考えて下さい。傷の中に、ぐるっと回って相手の心が入り込む・・・ちょっと怖いですかね？これが因果応報がこの世でなされている構図です。

何々でなく、何々もまた、と合目的性

not only but alsoと、合目的性は、つながっています。自分の傷は、自分を省みるというプラス、（理にかなっている）そして、あなただけでなく、相手もまた、大きく苦しんでいるのです。私はその意味を、日野原重明先生の「十歳のきみへ」という本で考えさせられました。私には、大きな傷があります。しかし、相手にこぶしをふりあげてはならない。なぜなら、not only but also私だけでなく、相手はもっと苦しい人生を送っている、いや、苦しくなくても、罪のないものを傷つけた人ほど悲惨な日常を送る人はいないからです。そこのところが、「合目的性」（理にかなっている）のです。

えにちは、縁と書くようですね。傷つけあうのもえにし。しかし、合目的性は、カントが最後の批判書で分析し続けるほど難しい。もっと言えば、カントはこの言葉を分析しきれなかったからこそ、次に、「単なる理性の限界内の宗教」という、宗教の可能性を示唆する本を書いたと思われます。因果応報とはあるのでしょうか。カントは、仏教も少しは勉強していたようですが、キリスト教批判を行っています。カントはその後、宗教に関して公に語ることを禁止されてしまいますが、カントがやりたかったことは、死後の楽園を夢見ることではなく、人間の根本悪を見据えた上に成立する、道徳宗教であったとおもわれます。しかし、この世界において、宗教が成立するには、キリスト教批判と、仏教についての洞察が必要であったと思われます。「えにし」です。

悪い人間とも出会い、人を見極める力をつけ、成長していくのに、人は傷を避けられません。一生残る傷もあるでしょう。しかし、「合目的性」がある以上、恐れることはないのです。本当に理不尽な傷を負った人こそ、その傷と戦い、癒していくことで大きく成長するのです。not only but alsoですよ。あなたの傷こそ、相手の人生を吸収し、相手をスカスカにするのですから、仕返しなんていらぬのです。

縁起

縁起という言葉が仏教であります。これは、「他との関係が縁となって生成すること」という意味です。私は、個人的には、死後の世界は楽園などではないと思っています。私が宗教家ではなく、哲学をする人間だからであります。仏教的なことは、この世の道徳を修めるためであると思っています。宗教を信じ、信じて教えさえ守れば、また、いいことばかりすれば、楽園に行けると考えることほどおこがましいことはありません。それは、偽善です。結局は全て自分の死後の幸せのためではありませんか？

宗教は、その意味で、この世だけのものであるべきです。「道徳宗教」としてだけ成立し、死後は、ないものと考えてほしい。死後の世界でも、この世と同じように、苦しんで、何かを築くべきなのです。そのためには、なるべく、この世で、苦しみと対峙し、ケリをつけたいですね。あの人には天罰が下るだろうなどと、神様に一任せずに、この世で、自分の気持ちにケリをつけたいものです。そのために、「縁起の法」を使います。つらい傷も、糧にして、相手をあわれんでやって強い気持ちで生きて下さい。理不尽な人になど、空虚な、人を差別する、悪口を言う人生しかないのですから。

参考文献

日野原重明「十歳のきみへー九十五歳のわたしから」